

きょうもまだ雨が降り続けている。まるでバケツの水をぶちあげたようだ。川はどす黒くにごっていて、今までよりも二倍も三倍もふえて、一本の悪まのおびのように道をながして、田をくずして、流れていく。道にあふれたりした。山は巨人がつめでひっかいたようにくずれた。

おとなの人はカッパや、みのをきて田や畑を見に行った。ガラス戸はがたがたゆれて、木はいまにもおれそうになって曲っている。ぼくはなかなかねむれなかった。あしたは、かいこ休みが終って、学校へいく日だ。ぼくは雨がやめばいいなあと思つて目をとじた。

朝五時ごろふと目がさめた。となりのおばさんのあわてた声がきこえた。

「支所がつぶれて T 君と S さんが、生きうめになったので、はやくきてくれつて。」と言つて外に出ていった。

ぼくは信じられなかった。きのう買物にいったとき、いきあつた T 君（T・K 君）が死んだなんて、ぼくはからだ全体が、こうつてしまいそうに寒くなつた。

いてもたつてもいられなかった。居間にいくと、とうさんが出かけるところだった。

朝ごはんをたべているとき雨はやんだ。

「きょうこういうことがあつたので休みだ。」というしらせがきた。

ぼくは支所へいくとちゆう、T 君のことを考えながらいそいでいった。道には雨のおつたあとがはつきり残っていた。

支所へいつてみると、おおぜいきていた。家が県道のほうにたおれそうになつて、こ・う・か・ん・台（電話交換台）のあつたところなど、土にうまつていた。家もうら山の土に半分ぐらいうまつてしまった。家のまわりも中もへんなにおいでいっばいだった。

中にはいると、はしらはたおれて、いろいろ売るところはめちやくちやくにされ、ガラスまどはこわされて、なんともいえないほどめちやくちやくになつていた。中にはいったとたん、T 君と遊んだこと、けんかしたことがわき出てくるように思いだされた。

ぼくは外にでた。そして学校のほうにとんでいった。ただむちゆうではしつた。頭の中は T 君の思いで、いっばいだった。

その夜はろくにねむれなかった。なんであんなになかよしだったのに、死んでしまったのだろう。T 君のことを考えながら目をつぶつた。

よく日は T 君のそう式だった。みんないっしょに学校を出て峠にいった。さいごの T 君の顔を見たとき、思わず目の上があつくなつた。おはかにいけたとき、そつと土をきせてやった。かえりに T 君のおかあさんが、帳めんをくれた。この帳面を T 君だと思つて、いつまでものこしておきたいと思う。